

農林センター試験研究成績報告会を開催しました

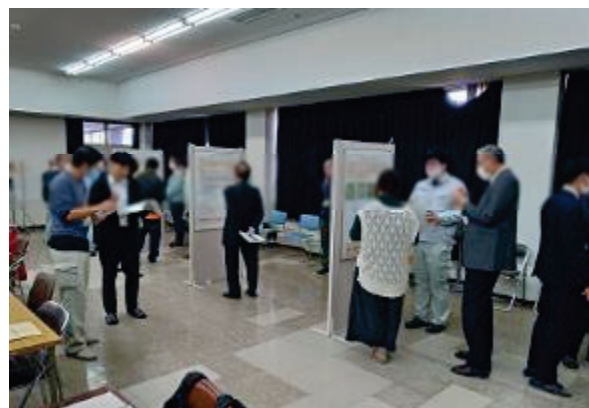
当センターでは、研究成果を府内の農業関係者に活用していただくため、試験研究成績報告会を毎年開催しています。今年度は、会場(亀岡)での対面方式とオンライン配信を併用する開催とし、口頭発表5課題とポスター発表14課題を報告しました。

当日の参加は、亀岡会場38名、オンライン68接続で、それぞれの報告に対し意見交換が行われ、オンラインからも多くの質問が寄せられました。

終了後のアンケートでは、口頭発表に対しては「分かりやすかった」「興味を持った」という評価が多く、ポスター発表では「京式部」の早植高品質栽培技術の確立、万願寺トウガラシや黒大豆エダマメの収穫・調製の機械開発、及びエダマメ栽培における緑肥を利用した施肥法の確立などへ高い関心が寄せられました。



口頭発表の様子



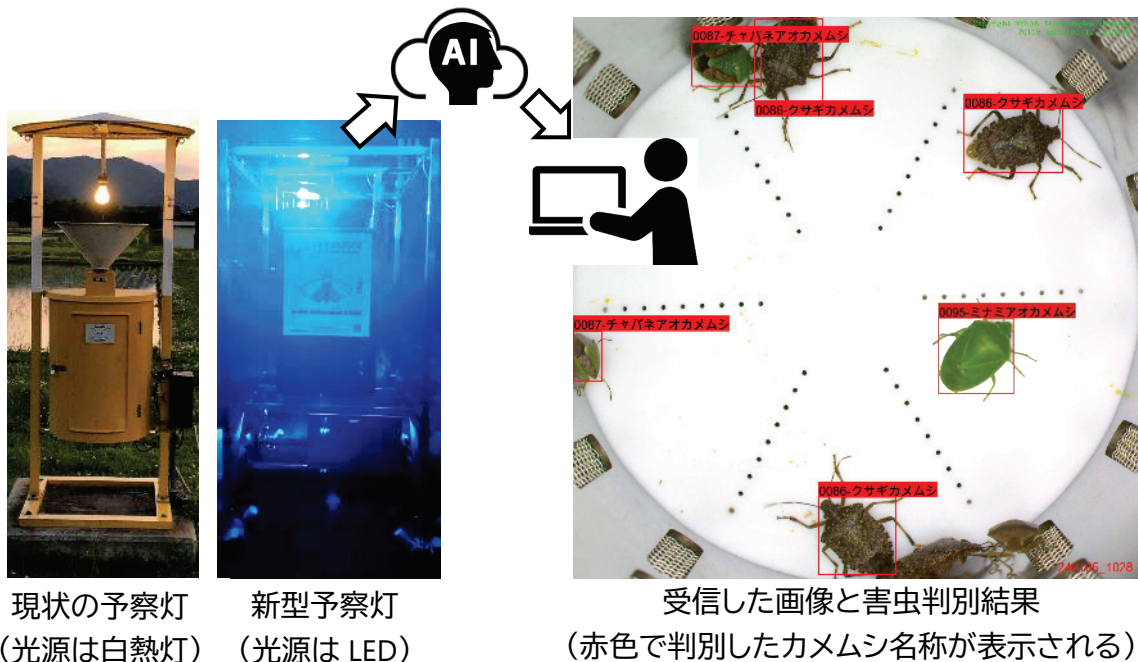
ポスター発表の様子

「新型予察灯」で害虫をAI自動判別

病害虫防除所では、夜間に白熱灯等で農作物の害虫を誘引・捕獲する「予察灯」を、府内3か所に設置し、4月から10月まで害虫の発生時期や発生量を調べています。しかし、捕獲した害虫は7日分しか本体内に格納できないため、現在は週に1回職員が回収しています。さらに、捕獲した虫の種類を調べて計数する手間がかかります。

近年開発された「新型予察灯」は、光源にLEDを利用し、15分毎に内蔵カメラで撮影、AIにより害虫の種類を判別し計数するものです。パソコンでデータを受信できるため、捕獲した害虫の回収に赴く必要はなく、種類を調べて計数する手間も省けるようになります。

当所では昨年12月に導入し、果樹や豆類の害虫のカメムシ類を室内で飼育して装置に投入し、AIによる判別性能を検証しています。今後は4月から10月まで実際に作動させて、カメムシ類に加えてガ類等他の害虫での判別性能を検証し、病害虫発生予測業務の効率化を図ります。



ニンジンの収穫を行いました

丹後国営開発農地において生産が推進される加工契約野菜、その作付の95%はキャベツなどアブラナ科が占めており、連作障害を回避できるアブラナ科以外の品目が求められています。また、端境期に当たる1月に収穫できる換金作物の要望があります。そこで、ニンジンの1月収穫の作型の確立に向けて試験を行っています。

今年度は、これまでの試験でこの作型に適していることが分かった品種について、作付年次による収量・品質の安定性を評価します。



9月7日播きニンジンの収穫作業の様子(1月5日)、収穫したニンジン(右下)

宇治茶生産の新たな担い手が巣立ちます

当所は、宇治茶生産の担い手を確保し、新規茶業経営者の育成を図るため、令和元年度に「宇治茶実践型学舎[※]」を設立し、京都府内での就農を支援しています。このたび、宇治茶実践型学舎の3期生が2年間の研修を修了したため、1月26日に卒舎式を行いました。

修了生からは、「学んだ知識や技術を活かして、高品質の宇治茶を作れる農家になりたい」と決意表明がありました。今後、修了生は、実地研修を行った南山城村で新規就農することとしており、宇治茶生産農家としての第一歩を踏み出します。

当所は、今後とも、より多くの茶業の担い手を送り出せるよう努めていきます。

※宇治茶実践型学舎:茶業経営に必要な茶園管理、製茶加工に関する基礎的な知識や技術の研修と就農地で先進農家の元での実地研修を組み合わせたカリキュラムにより、原則2年間で技術や経営能力を身につけることができる研修制度



修了証書を受け取る修了生



就農に向けて決意を新たにする修了生

宇治茶アカデミー10周年記念公開セミナーの開催

当所では茶業関係団体と連携して、京都府内で茶の生産、流通・販売や加工商品の製造・販売等を行っている若い担い手を対象に、経営力、宇治茶の伝統や価値の発信力を高めるとともに、参加者同士の交流・連携を深め、宇治茶のイノベーションにつなげるため、平成26年度から宇治茶アカデミーを毎年開催してきました。今年度10周年を迎えるに当たり、この10年間を総括するとともに、今後の宇治茶のさらなる発展に向けて、1月16日に公開セミナーを開催したところ、110人の参加がありました。

講演では、農研機構果樹茶業研究部門の水上裕造上級研究員が「宇治茶の香りが未来を拓く」と題して、宇治茶のおいしさを感じさせる香りの重要性を話されました。

パネルディスカッションでは、当アカデミーの総括アドバイザーである京都府茶業会議所の会頭、副会頭の3名が登壇し、10年間の成果や今後の展開への期待等を語り合い、「若い人には、いろいろな人の話を聞き吸収し、イノベーションを起こし、1000年先も京都のお茶が残るように頑張ってもらいたい」とメッセージをいただきました。

当所では、今年度、当アカデミー全4回の開講を予定しており、宇治茶のさらなる発展に向けて取り組んでいきます。



水上上級研究員の講演を熱心に聞く参加者



若い担い手へメッセージを送る
総括アドバイザー

試験研究課題: パパイア輪点ウイルスに対する同属ウイルスの干渉効果に基づく防除技術の確立、九条ネギへの「まめリッチ」施用による新栽培体系の確立

各種研究成果を生産者の研修会で報告

研究成果を生産者へ発信することは、生産現場における課題の解決、新たな技術の普及等を行う上で重要です。そこで、1月23日に、キュウリの生産者に対して、府内のキュウリ栽培において発生するウイルス病の防除技術である、植物ワクチンに関する研究成果を報告しました。研修会では、使用する植物ワクチンの種類、選び方等について質問が寄せられ、活発な意見交換を行いました。

また、1月24日には、ネギの生産者に対して、微生物資材を用いた、ネギの病害抑制技術に関する研究成果を報告しました。研修会では、微生物資材と化学農薬を組み合わせた栽培体系、微生物資材のコスト等について質問が寄せられ、活発な意見交換を行いました。

今後も、当センターでは様々な研究成果について、迅速に幅広く情報発信して参ります。



キュウリ生産者の研修会



ネギ生産者の研修会

京地どり研究会の開催

当センターは、1月17日に京都市にある老舗北京料理店東華菜館で、京地どり生産・流通推進協議会との共催により「京地どり研究会」を開催し、生産者、流通業者、飲食店関係者、京地どり飼養を希望する農業法人など42名が参加しました。今年度は、新たなマーケットとしての北京料理での試食や、農研機構研究員から「地鶏、銘柄鶏らしさをどう評価し、活用していくか」について講演を行いました。

その後の意見交換では、新たな料理の可能性や鶏ガラスープ等京地どりを使った商品開発について意見を聞くことができました。京地どりの生産と流通の拡大を目指す当センターでの今後の試験研究に活かしていきたいと考えます。



京地どりを使った北京料理の試食



農研機構による地鶏らしさに関する講演

京都府の定置網で寒ブリが豊漁

京都府の基幹漁業である定置網では、年間を通して様々な種類の魚が漁獲されます。中でもブリは、まとまって漁獲されることに加え単価も高いことから、定置網漁業の重要種となっています。ブリは春になると餌を求めて日本海を北上し、冬には脂肪を蓄えて産卵のため南下します。南下する個体は寒ブリと呼ばれ、日本海の代表的な冬の味覚として、各地で漁獲されます。

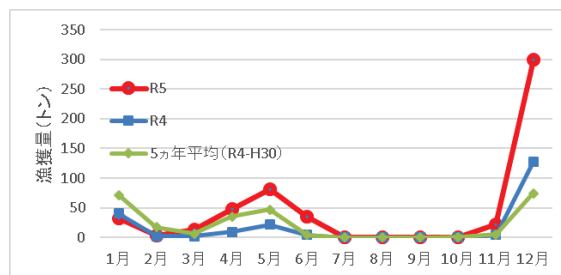
京都府では、令和5年11月下旬以降、魚体重が9～10kgのブリの漁獲量が増え始め、12月には昨年の2倍強(5ヵ年平均の約4倍)の漁獲がありました。このようなブリの豊漁は、京都府だけでなく、日本海側の各地でも報告されています。

ブリの豊漁の原因については明らかではありませんが、沖合の水温が低く、それを避けたブリが比較的沿岸を回遊したため、漁獲が多くなったと考えられます。

今後も引き続き、情報やデータの収集、分析を進め、ブリ資源の動向を調査していきます。



舞鶴市場にならぶブリ



ブリ銘柄(約4kg以上)の月別漁獲量